

9. 学園都市コインブラ



コインブラ大学の旧校舎群に囲まれる中に立つと、ポルトガルがヨーロッパでも西の辺境の国であることに甘んじていることが不思議に思えてくる。

「涙の泉」で処刑されたイネスが最初に埋葬されたのがサンタ・クララ修道院だが、そこは度重なるモンデゴ川の氾濫のために破壊され、現在は高台に移されている。古い方のサンタ・クララ修道院は保存遺跡として博物館になっていた。



「涙の泉」への入り口はゴルフ練習場になっている。この日は週日というのに子ども達が練習していた。この子たちが自分の国の歴史について、どのように学んでいるかは旅行者でしかないわたしの知るところではないが、イネスの処刑地のすぐそばで屈託なくゴルフに興じている子どもたちと、その若い親らしいカップルを見ていると、なんだかホッとさせられる。

「涙の泉」は今では「涙の館・キンタ・ダス・ラグリマス」という名前の高級ホテルになっている。この練習場も隣接してホテルのアトラクションの一つになっているようだ。

このモンデゴ川はコインブラからの下流域に、豊饒な土地を恵んでくれている。モンテ・モール・オ・ベリョ城から見た広々とした田んぼも、この川があったればこそそのことである。しかし、その分すべての田園地帯の川と同様、時として氾濫し、河床を埋め流域を水浸しにしてきたようだ。旧サンタ・クララ修道院の地面は今のモンデゴ川からすると、ずいぶんと低い。移転を余儀なくされるほどの大水害があった後も、モンデゴ川は上流からの土砂で河床を浅くし、ついには当時の地面よりも川の底の方が高くなったのであろう。

今度のわたしの南蛮の旅で尋ねる場所は、カタルーニアのバルセロナ以外は全て大分と縁があるか、その縁に繋がりがあるかという事で選んだ。その意味で言うと、これから川を渡って尋ねるコインブラもそのあとポルトガル国鉄で向かうことにしているポルトも、大分との縁は薄い。それでも今度の旅でコインブラとポルトは外せない。

コインブラの町自体はアルメイダも伊東マンショたち天正遣欧使節も訪れてはいない。それでもわたしがこの町に来たかったのは、この町にあるコインブラ大学が、フランス

コ・ザビエルにとって、宗教学的にも、もっと基本的な精神のよりどころにもなっていたからである。ザビエルがイエズス会の派遣で東洋を目指すことになり、ポルトガルから船出をするためにリスボンに滞在していた頃には、彼の従兄マルティン・デ・アスクルピエタが総長を務めていた。その従兄をザビエルは尊敬し信頼していたようで、リスボンからコインブラを訪ねたい旨の手紙を書いている。

高台に移った現在のサンタ・クララ修道院からのモンデゴ川の向うに見えるコインブラ



新サンタ・クララ修道院の庭先に立つサンタ・クララ像は、どことなく悲しみを秘めてイネスの面影と重ねて見てしまう。イネスが処刑後一時的に埋葬されていたのは、旧修道院の方なのだが。そのサンタ・クララの視線の先には、コインブラの街並みが静かに広がっている。

の旧市街の風景は素晴らしい。町は小高い丘に築かれているが、その最も高いところに世界遺産にもなっている大学が文字通り聳えている。13世紀に創設されたこの大学は今でもポルトガルの学問的権威を誇る大学として8学部2万3千人の学生が学んでいる。

コインブラはリスボンに首都がうつされるまでのこの国の首都であった。わたしはだから、リスボンを東京、コインブラを京都と位置付けている。次の目的地ポルトはポルトガル最大の商都であり、従って大阪といえるだろう。



この大学の学生達は男女とも黒いマントを着ていることで有名だが、このお嬢さんは観光客相手のテンプラ学生だった。



モンデゴ川の水面と同じ高さの地面から発掘され、一部が復元されている旧サンタ・クララ修道院からコインブラ大学の聳える丘を見上げた。ここに来たがっていたザビエルはついにその思いを遂げることなく、極東の地に果てている。そして今、わたしが代わりに博物館となっている当時の大学を訪ねようとしていることに、感慨深いものを感じる。

世界遺産になっている旧キャンパスには、ザビエルを東洋に送ることを決めた時のポルトガル王ジョアン3世の石像が建っている。今にも学生達に「しっかり勉強しているか」と大声で呼びかけそうな迫力のある存在感である。さすがに旧首都だったらしく大学の周りにも、たくさん世界遺産があり、大学に隣接するマッシャード・デ・カストロ美術館にはローマ時代の地下堂がある。石造りの地下堂は時の移ろいを感じさせないが、この町の歴史の厚みを物語っていた。